



© UNICEF/Indonesia/Edy Purnomo

子どもの生存と成長を**促進**する

勝利のパレードを計画するには早すぎるが、子どもの生存面ではいいニュースが入ってきている。2006年、記録を取り始めて以来初めて、5歳の誕生日を迎える前に命を落とす子どもの数が1,000万を下回ったのである。

ミレニアム開発目標 (MDG) を達成できるか否かのわかりやすい指標が「子どもの生存」である。極度の貧困と飢餓の撲滅 (MDG 1)、子どもの死亡率の削減 (MDG 4)、妊産婦の健康の改善 (MDG 5)、HIV/エイズ、マラリア、そのほかの疾病の蔓延防止 (MDG 6)、環境の維持可能性の確保 (MDG 7)、開発のためのグローバル・パートナーシップの推進 (MDG 8) といった目標達成のための努力は、子どもの生存と成長を保障するユニセフの中心的な活動となっている。

最近のデータを見ると顕著な前進が見られる。はしかによる死亡数は減り続けており、サハラ以南のアフリカで削減率が一番大きくなっている。ユニセフと世界保健機関 (WHO) の2010年までにははしかによる死亡数を90%削減するという目標はすでに達成されている。世界全体のはしかによる死亡数は、2000年の推定757,000人から、2006年の約242,000人にまで減っている。3種混合 (ジフテリア、百日咳、破傷風) の予防接種を3回受けた人は、全世界で推定79%、2006年の段階で115カ国が90%以上の予防接種率を達成している。

2007年、エジプトとザンビアは妊産婦破傷風と新生児破傷風の根絶国と認められた。シエラレオネでは、ユニセフと多数のパートナーたちが「妊産婦・新生児破傷風に重点を置いた包括的な子どもの生存キャンペーン」を1週間実施し、120万人近い女性と83万人を超える6-59カ月の子どもにも予防接種を行った。イラクでは、困難な状況にも関わらず、460万人近くの子どもたちがポリオの予防接種を受けた。フィリピンの紛争地帯では、「平和の日」が実施され、3万5,000人の小さな子どもたちが予防可能な病気を防ぐワクチンの接種を受け、17万人がビタミンAを補給され、14万3,000人が寄生虫の虫下し薬を飲んだ。

マダガスカルでは、包括的なパートナーシップにより、2007年10月に、「母と子どもの週間」が実施され、370万人の子どもと110万人の母親が無料で保健サービスを受けた。スーダンでは4つのキャンペーンを通して、約610万人の子どもがポリオの予防接種を受けた。パキスタンでは、ユニセフの支援のもと、6,200万人の子どもたちに予防接種を受けさせるという、最大級のはしかの予防接種イニシアティブが開始された。ハイチでは、カナダ国際開発庁、ブラジル政府、ハイチの公衆衛生・人口省、汎米保健機関 (PAHO)、そしてユニセフが、拡大予防接種プログラムを支援し、5歳未満児約50万人、妊娠・出産年齢の女性70万人に定期予防接種が実施された。

子どもの栄養不良を改善する努力により、10カ国で「Sprinkles™ (スプリングルズ)」という複数の微量栄養素を含んだ小児用のふりかけの使用を拡大するイニシアティブが導入され、あるいは継続された。ペルーでは、大地震の際に一部配布されたほか、慢性の栄養不良への対策として、国家公衆衛生プログラムにも採用された。

安全な水、適切な衛生設備、良い衛生習慣は、小さな子どもの健康のために必須なものである。2007年、ユニセフは水、衛生、衛生教育プログラムを96の国で支援した。これは史上最多の国数である。さらに、コミュニティ自身が自らの力で、良好な衛生環境を作り上げていくコミュニティ主導の「総合的な衛生」プログラムの推進にも手を貸した。

2015年までにラテンアメリカとカリブ海諸国ですべての子どもの出生登録を実現するため、ユニセフは米州機構 (OAS) や米州開発銀行 (IDB) とパートナーシップを結び、国連の「Delivering as One (一貫性を持った支援)」の中で子どもの問題に関して主導的立場に立った。また、はしかの予防接種、ビタミンA補給剤、殺虫剤処理された蚊帳の提供を目的として、コミュニティを中心としたプログラムに参加。子どもの生存と開発に焦点を置いてミレニアム開発目標の達成を促進している。

FAST FACTS

数値が語る世界

2006年に死亡した子どもの数：**970万人**

そのうち開発途上国で死亡した子どもの割合：**99%**

先進国の5歳未満児の死亡率：**1,000人あたり6人**

サハラ以南のアフリカの5歳未満児の死亡率：
1,000人あたり160人

子どもが亡くなる主要な要因（エイズ、マラリア、はしかを
合わせた症例数より大きいもの）：**肺炎**

開発途上国での低体重児（5歳未満）の数：**1億4,300万人**

低体重児が最も多い地域：**南アジア**

ヨード欠乏症により脳に障害をこうむる危険性のある新生児の数：
3,800万人

ヨード欠乏症を予防するために一生涯に必要なヨードの量：
小さじ1杯*

サハラ以南のアフリカでビタミンAの欠乏症の危険性がある
子どもの推定数：**4,300万人**

ビタミンAカプセルの値段：**0.02米ドル（2セント）**

安全な飲み水を手に入れられない子どもの数（5歳未満）：
1億2,500万人

適切な衛生設備（トイレ）のない家に住む子どもの数（5歳未満）：
2億8,000万人

妊娠期あるいは出産時に命を落とした女性の数（1990年）：
576,000人

妊娠期あるいは出産時に命を落とした女性の数（2005年）：
536,000人

ギリシャでの妊産婦死亡率（出生10万人あたりの報告数）：
1人

シエラレオネでの妊産婦死亡率（出生10万人あたりの
報告数）：**1,800人**

このページを読むのに必要な平均時間に命を落とした子どもの数：
18人

* 注：但し、ヨードは一度に大量摂取することはできない。



© UNICEF/HQ07-0196/Christine Nesbitt

成果

ナイジェリアで素晴らしい動きがある。かつてポリオが席捲したこの国で、今、革新的なプログラムやイニシアティブが盛んになっている。以前は、子どもの予防接種の案内を「結構です」と言って断り続けてきた人たちが、今では感謝を込めて受け入れているのである。

このような大きな変革がもたらされた裏には、タラトゥ・アダムのような人たちの努力がある。彼女は村の指導者で、22年もの間伝統的な出産介助を行ってきた女性である。朝6時に彼女の1日が始まる。母親たちを起こしてまわり、子どもたちに予防接種を受けさせなさいと促すのである。子どもたちにすべての予防接種を受けさせた人には殺虫剤処理した蚊帳を無料で提供するから、という彼女の約束は、母親たちにとっても断りがたい魅力がある。

家から家へと一戸ずつ訪問していくこの特殊なキャンペーンは、予防接種「プラス」の日の前に行われた。ナイジェリア北東部のバウチ州の小さな村イサワでのことである。タラトゥは、社会動員チームの一員で、さまざまな地区に設置された予防接種会場に子どもたちを連れてくるよう、親たちを説得する役割を担っている。タラトゥは、家々を回りながら、予防接種を受けるべき子どもたちのリストを更新し、予防接種を受けない子がいないようにする。さらに、

親たちに、予防接種会場では虫下しの錠剤、痛み止め・解熱剤となるパラセタモール、ビタミンAの補給剤が貰えることを念押しして、来場を促す。この村で行われたキャンペーンは、147の地方政府が主導した「予防接種『プラス』の日」のひとつで、2007年3月29日から4月1日の間に20の州で行われ、640万人を超える子どもたちに予防接種を実施することができた。蚊帳の購入は、ナイジェリアでの感染症予防のために日本政府が拠出した資金3,620万米ドルの一部から出された。

予防接種「プラス」は、コミュニティを中心とした支援事業を通じて、西部・中部アフリカ全体で新生児死亡率、5歳未満児死亡率、妊産婦死亡率を削減しようとする「子どもの生存と発達促進」イニシアティブの一部である。妊産婦と新生児の保健、予防接種、子どもの疾病の予防、適切な栄養、安全な水、適切な衛生設備、改善された衛生習慣、心理社会的なケアに重点を置いた総合的なサービスとなっている。

ナイジェリアでは、信頼できるおとなだけが子どもの早期ケアに長けているわけではない。学校に通う子どもたちも活躍している。「予防接種のために、子どもから子どもへ戦略」は、小さな子どもたちに予防接種の利点を説くことができる生徒たちを育てる研修プログラムである。研修を受け

た子どもたちは、それぞれ5歳未満の子どもを5人選び、その子どもたちが必要な予防接種をすべて受けるよう、子どもの家族をフォローするというシステムである。注射を受けたという印が指についていない場合（注：途上国では注射を受けたことがはっきり分かるように指の爪に色や塗料を塗る）、予防注射の大切さを説明して、近くの予防接種会場まで子どもたちを連れて行く。2007年に、予防接種したかどうかを見守るために「登録」された小さな子どもの数は264,523人。予防接種率は平均93%にまで上った。

こうした総合的なキャンペーンの成果は大きい。ナイジェリアでは、2006年に1,122例だったポリオの症例が2007年末には286例に減り、バウチ州のポリオ感染例は2007年末までには、27例となったのである。

幼い子どもを対象にした総合的なケアのおかげで、5歳未満児の死亡率が全体として大幅に減った。タラトゥ・アダムは、自分がこの成功の一翼を担ったことを知っている。「ほとんどの子どもたちを（出産時に）私が取り上げているので、みんな私を信頼してくれています」と彼女は言う。「私が取りあげた子どもたちばかりだから、私が害のあることをするはずがないって知っているのです。」